日本初!〈社会組織〉〈コミュニティデザイン〉〈グローバル・リスクガバナンス〉3つの分野を学べる大学院

立教大学大学院　21世紀社会デザイン研究科

Social Designer vol.31

巻頭インタビュー

「新しい社会」をデザインする
――国際的な観点から見る21世紀社会

アドバイザリーボード・秋山昌廣さんに聞く
「下から積み上げてきたものを理論化するプロセス」が大切

中央省庁の要職を歴任しながら、国家の危機管理分野に長く携わってきた経歴を持ち、現在は安全保障外交政策研究会の代表を務める秋山昌廣さんに、これからの21世紀社会デザイン研究科に期待する役割についてお話をうかがった。

【インタビュアー:萩原なつ子 研究科委員長・教授／中森弘樹 助教※1】

秋山 昌廣（あきやま まさひろ）さん
立教大学21世紀社会デザイン研究科アドバイザリーボードメンバー。東京大学法学部卒業後、1964年大蔵省に入り、主計局主計官、奈良県警察本部長、東京税関長、防衛庁防衛局長、防衛事務次官を歴任。退官後、ハーバード大学客員研究員、海洋政策研究財団会長、東京財団理事長を務める。現在は、安全保障外交政策研究会代表。

萩原 なつ子（はぎわら なつこ）
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科委員長・教授。(公財)トヨタ財団アソシエイト・プログラム・オフィサー、宮城県環境生活部次長、武蔵工業大学環境情報学部助教授を経て現職。認定NPO法人日本NPOセンター副代表理事。専門分野は環境社会学、非営利活動論、ジェンダー論。

―― 研究科との関わり

萩原／21世紀社会デザイン研究科が2002年にスタートしてから、今年で17年になります。秋山先生には、ご自身が着任されたころに21世紀社会デザイン研究科に求められていた役割と、いま、そしてこれからの21世紀社会デザイン研究科に期待する役割について、秋山先生のご専門の、「国際」の視点も含めて、お話ししていただければと思います。

秋山／2004年に21世紀社会デザイン研究科へ来たとき研究科には三つの分野がありました。危機管理（グローバル・リスクガバナンス）、コミュニティデザインと、社会組織理論。危機管理にも色々な分野があって、まず自分個人の危機管理、家の危機管理、それから、病院の危機管理とか、組織や法人の危機管理とかね。さらに地方自治体や国の危機管理。

それで、私が依頼されたのは、国防とか、安全保障、つまり“国の危機管理”でした。当時、危機管理分野の主流は、どちらかといえば病院の危機管理とか、自然災害に対して地方自治体がどうやって危機管理しているかとか、そういう話でした。私も21世紀社会デザイン研究科ではそちらが主流だなと思っていたのですが、意外だったのは、学生がけっこう、国の危機管理に関心があり、僕のゼミを取ってない人も沢山授業に参加してくれたり、関心を持ってくれたという印象を強く持っています。ただ、やりながら、21世紀社会デザイン研究科の中で、国防の位置づけは非常に難しいなという気はしていましたね。

大規模災害に対してどうやって危機管理するのかとか、それから病院の危機管理とか、大企業が失敗したときの危機管理とか、これは21世紀社会デザイン研究科の議論として僕も非常に面白くて参加しましたよ。21世紀社会デザイン研究科ならこういうイメージじゃないか、こういうことじゃないかって、国家の危機管理からやや離れたことについても、いろいろ発信してきたつもりです。

―― 理論化のプロセスを提供する

中森／お話をお伺いして、先生はすごくグローバルな視点でこれまで研究をされてきたと私の方では理解しました。私はこの4月に研究科に着任したのですが、学生の研究のスタイルを見ていると、自分の人生とか、身の回りの生活などから問題意識を得て、それらを論文にしようという人が多いと思うんですよね。それって、すごくいいことだと思うんです。その一方で、問題を広い視点で見ることが苦手な人が、もしかしたら多いのかなって、ちょっと私は思っています。そのあたりについて、広い視点から物事を見てきた秋山先生から、アドバイスをお願いできますか。

秋山／自分の身の回りから、また具体的な事象から、研究を始めて、何かを発見しようというのは、全然間違ったことではないと思います。問題は、個別の事象から一般化する段階で、理論が提示されてないことなのかなと思います。「広い視点」とは、言い換えれば、理論的なものが話されていないということですよね。たとえば僕の分野でいえば、危機管理を研究するために、安全保障の理論を勉強したりする必要があります。ですから21社会デザイン研究科では、下から積み上げてきたものを理論化するプロセスを教えることが大事だと思います。アンケート調査に終わっちゃうとか、事例集で終わっちゃうのは残念ですね。

萩原／私も修士論文を書いていた頃は、「どこに論があるの？」って、散々言われました（笑）。ここに来る人たちには、自分自身の仕事だったり活動だったりを言語化して、整理して、自分のやっていることの意味や役割を明らかにしたいという気持ちがあると思うんですよね。
秋山／そうですね。
萩原／それをどういう風に可視化させて、理論化させていくのか。そこをお手伝いすることが、私たちの役目ですね。

—— 暮らしやすい社会、価値ある社会

萩原／オムニバス講義（21世紀社会デザイン研究科の教員によるリレー講義）の最初の回で、「社会デザインとは何か」というテーマで、入学してきたばかりの学生たちとワークショップをしたんですよ。そしたら、五目どんぶりでしたっけ？
中森／海鮮丼。
秋山／海鮮丼？　何ですか、それは。
萩原／基本が米で、そこに酢が入って、いろんな具が入って、それが社会デザインみたいだ、とか。いろんなアイデアが出てきました。
秋山／学生の方から？
萩原／そうです、学生の方から。まさにダイバーシティがキーワードで、色んな方たちが働きやすい、暮らしやすい、生きやすい社会を作っていくための仕組みを考えたり、家庭のあり方とかも含めて考えよう、という意見も出てきましたね。
秋山／そうですよね、暮らしやすい社会、豊かな社会、価値ある社会とは何か。
萩原／それらはSDGs（持続可能な開発目標）の話につながりますね。先生、SDGsについてはどうお考えですか。
秋山／今年の3月、立教大学で講演があった「ポートランドの新しい社会づくり」※2は、一つの見本ですね。新しい、国際的な観点から見た21世紀社会のデザイン。非常に面白いことやっていますよ、彼ら。
萩原／21世紀社会デザイン研究科では、国際的な視野で何かをしようという学生は少ない印象があります。それは科目の問題なのかもしれませんし、教員の問題なのかもしれないんですけど、そういう意味では、もうちょっとポートランドの事例などを知ることによって、それを日本にも活かすという発想が出てくるかもしれませんね。

—— “新しい社会をデザインする”学生に向けて

萩原／ITやAIなど、新しい科学技術が社会にインストールされていくときの色んな影響みたいなものを、21世紀社会デザイン研究科としては、しっかり見ていかないといけないと思います。それは、ある種の危機管理的なものでもあるんですけど、そのあたりについてお伺いできますか。
秋山／キーワードとしてね、AI、ロボット、情報。これらが、社会にどんな影響を与えるのか、21世紀社会デザイン研究科で、ぜひ考えてほしいですね。
萩原／本研究科の長（おさ）先生が中心となり、今年の2月に「キラーロボットのない世界に向けて」と題したシンポジウムを開催しました。
秋山／日本独特の課題として、やっぱり自然災害は大きなテーマですよね、日本の社会にとって。これ、東日本だけではなくて、今や西日本の方が焦点を当てられてますよね。直下型地震が東京で起こったら、日本は潰れちゃうんじゃないでしょうか。でも潰れずに、きっと再建するんでしょうね。
萩原／復興するんですね。そういったときに科学や技術というものが、そこにどう関わってくるのか。実はITが、NPOの活動とか復興支援にものすごく大きな力を持っているということで、研究が非常に進んでいるんですね。
秋山／ITにしてもロボットにしても先端技術にしても、そういったものが発達したときに「社会がどうなるのか」と、「どういう社会にしたらいいのか」というのを議論するべきなんでしょうね、この研究科でね。この研究科は社会に焦点を当てているわけですからね。
萩原／では最後に、21世紀社会デザイン研究科の学生さんに向かって、メッセージをお願いします。
秋山／社会で仕事をしている方が沢山来ているわけですから、何らかの疑問とか、社会に対する理想や希望を持っているはずです。だから社会デザイン研究科に入学されたのだと思うのです。キャリアアップのためだけに来た人もいるかもしれないけれども、そうだとしたら、この21世紀における新しい社会では何が問題なのか、どうしたらいいのか。我々は社会に何を期待するのか、ということを考えてもらいたいですね。もちろん実証研究からやらないといけないけれど、どういう社会にしたいのか、あるいはどういう問題が社会にあるのかを明らかにするという、そのあたりのことを意識し、学びながら研究をして、論文を書いてほしいと思います。
　さらにもう一つ、論文は推敲しなきゃ書けない。以前、21世紀社会デザイン研究科の特任教授だった立花隆先生が、当時のガイダンスで言われたように、推敲に推敲を重ねて書いてください。
萩原／今日はありがとうございました。
秋山／ありがとうございました。

（※1）中森助教の紹介は5ページにあります。
（※2）講演会の詳細については、6ページをご覧ください。

海道 信明 さん
（かいどう のぶあき）

保険業界にて、働き方改革やコーポレートガバナンスに関する保険手配に従事。とあるきっかけで社会保障の価値を実感し、ダイバーシティに関心を持つ。障害者家族に関する研究に従事中。博士課程前期2年。萩原ゼミ。

磁石の向きを傾ける

社会課題と言われても壮大すぎて遠い世界。入学前の私はそう考えていました。しかし、入学から1年以上経ち、今では身近なものとして捉えるようになりました。

私は本研究科で学ぶ中で、磁石を意識しています。2つの磁石のS極同士、N極同士はそれぞれ反発しあいます。ここで、どちらかの磁石の向きを傾けていくと、最後にはS極とN極がそれぞれ向き合ってくっつきます。お互いが同じ方向を向いていると、どちらかが課題を抱えていても、気づかず見過ごしてしまうことも多いと思います。本研究科では、自分の磁石の向きを傾け、相手と向き合う方法や姿勢を学ぶことができます。

ところで、私のような平日フルタイムで働く会社員が仕事と学びを両立できるのでしょうか。そんなに簡単にはいきません。授業に遅刻することもありますし、読みたい本は常に5冊以上溜まっています。しかし、なんとか両立できています。なんとか捻出した学びの時間の価値を感じ、高い志を持つ仲間同士で励ましあいながら学んでいます。これが楽しく、そして辛く、だからこそ糧になっています。密度の高い2年間も、あっという間に残り半年となり、学びを実践に移す時期が近づいてきました。

高瀬 桃子 さん
（たかせ ももこ）

中村ゼミ所属。大学卒業後、（公財）キープ協会環境教育事業部、（公財）日本野鳥の会普及室販売出版グループ等を経て、現在は主に横浜市のソーシャルビジネス支援や、NPO・NGO分野の広報に関する業務に携わっている。博士課程前期2年。

思考に没頭できる場所

「いつか大学院に行こう」大学時代に植物生態学を専攻し、研究の面白さを知ってしまった私は以前からそう考えていました。年の瀬、ふと思い立ち何かと縁のあった立教大学に願書を送り、あれよあれよという間に春には入学していました。

もちろんそこに辿り着くまでに意識的ではないものの、社会人経験を通して社会のあり方や自分自身の専門分野について、もっと掘り下げて思考してみたいと思っていたことは間違いありません。忙しさにかまけ流されがちな日々でしたので、学問の場に身を置き、論文というタスクを自らに課し、様々な専門分野の先生方からヒントをいただくことで、ようやく自身の問題意識にじっくり向き合えるようになりました。研究テーマは、ここ数年関わってきたボランティア活動のひとつである「プロボノ」。常に実践とリンクさせながら研究できるのは非常にありがたいことです。

個人的に大抵のことは運と縁と勘で決まると思っていて、「今このタイミングな気がする」という根拠なき確信こそ、結構正しいと思っています。それを信じて飛び込んだこの研究科は、テーマも人も稀にみる多様性（カオス?）でした。きっと後々振り返って、貴重な時間だったと感じるのだろうと思っています。

笹原 明代 さん
（ささはら あきよ）

上智大学卒業後、読売新聞社入社。広告営業、映画製作事業、デジタルメディア編集などを経て、現在はセミナー事業企画運営。博士課程前期2年。萩原ゼミ所属。

大学院で育む「新しい自分」

「私って今空っぽなんじゃないかな?」と思い浮かんだのが、49歳の時。就職、結婚、出産を経て、仕事・家事・育児・介護を同時並行でこなすギリギリの日々。自分を消費するばかりで、新たなインプットが全くできていないと感じていたことが、言葉になって出てきたのだと思います。

そこからいろいろな学びにチャレンジする中で、自然に「大学院への進学」という選択肢が見えてきました。この21世紀社会デザイン研究科を選んだのは、魅力ある先生の存在と「社会をデザインする」という考え方に惹かれたからです。

私の研究テーマは「女性が『自分自身』であり続けられる生き方と社会」。様々なライフスタイルのワーキングマザーを対象として「働き続ける女性の『しんどさ』の正体と、それに向き合う生き方」について研究しています。仕事との両立は正直大変ですが、毎日少しずつでも進められるよう意識することはとても大切です。

大学院に通う楽しさは、幅広い教養との出会いはもちろんですが、個性ある先生方や学生同士の交流、図書館や学食が利用できるなどのキャンパスライフにもあります。どれもが私にとっては「ワクワク」の素です。この経験がこれからの人生を更に素敵なものにする、新しい『私自身』を創造していると感じています。

関口 幸雄 さん
（せきぐち ゆきお）

中村ゼミ所属。東京都生まれ。大学卒業後、公立小学校に勤務（学級担任を約20年間、校長・副校長を約20年間）。履歴書に書けば一見単調に読めますが、けっこう疾風怒濤の日々でした。その後、立教セカンドステージ大学を経て、2019年春に21世紀社会デザイン研究科入学。

風通しの良い広場で

この原稿を打っているのは7月上旬雨の日。先週末に、本研究科（1年次）による「研究状況報告会」が終わり、ちょっとほっとしているところです。

私は公立小学校に約40年間勤務し、そのあと立教セカンドステージ大学を経てこの研究科にたどり着きました。この場所は、私にとって〈風通しの良い広場〉です。入学して3カ月足らずなのに、院生同士のコミュニケーションが活発で笑顔が絶えません。また先生方と私達の間柄も円滑で淀みがありません。そして何よりも素敵なのは、この社会を良い方向にデザインしていこうとする創意と熱意に溢れていることです。

ところで私の研究テーマは「サードプレイスとしての公共図書館」です。自分が関わってきた教育という営みを地域と公共から見つめ直し、再提起できれば･･･と考えています。うれしいことに!!!ここでは多様な思いや考えを交流することができるので、はじめは冷たく観念的だったテーマも熱く具体性を帯びてきます。

おわりにひと言。現場を持つひとの意見は本当に迫力がありますね。目から鱗です!　そんな感動を心の糧にして、きょうも授業に向かいます。

道に迷っているあなたへ

2019年卒
三浦 和紗 さん
（みうら かずさ）

熊本市出身。2015年に日本女子大学文学部史学科を卒業後、本研究科に入学。東京都美術館インターン、熊本市現代美術館での勤務を経て、2019年3月、博士課程前期課程修了。現在は（公財）としま未来文化財団で文化施設の開設準備に携わる。

アートに関わる仕事をしたい。そんな思いから進学を決意した大学生の私は、先の見えない不安でいっぱいでした。今回、Social Designerへの寄稿にあたり何を書こうか非常に悩みましたが、この研究科に入るべきか迷っている方に、そしてあの頃の自分に語りかけるつもりで、私の学生生活についてお話ししたいと思います。

大学院生になるにあたり、私は1つ目標を立てていました。それはM1の早い時期からアートの現場経験を積むこと。幸い入学後すぐ美術館のインターンに採用され、日中はインターンとして働き、夕方になると学校に向かうという生活が始まりました。膨大な量のインプットに追われ、体力・精神面においてしんどい時期もありましたが、学校で会うみなさんとのふとした会話に幾度となく元気をもらっていました。大学院の授業は私がそれまで行ってきた勉強とは質的に異なるもので、事実を客観的に把握する力、自分の意見を端的に述べる力を求められていたような気がします。1つ学びを得るたび固定観念がゆさぶられ、自らに課していた枷のようなものが取れていくような感覚を味わうことができたのも新鮮な経験でした。

順調な学生生活を送っていた私に転機が訪れたのはM2になったばかりの2016年4月。故郷が大きな地震に襲われ、よく知る風景が大きく変わってしまいました。すぐに現地へ向かうこともできず悶々とした日々を送る中、地元の美術館が採用を行うことを知り「何か私にできることはないか」という一心で試験を受けてみることにしました。採用のオファーをいただいたときは正直驚きましたが、先生の後押しもあり、休学して熊本で約1年半、かけがえのない経験をさせていただきました。そこで見聞きしたことを論文にまとめ、現在に至ります。

人より時間をかけた4年間の学生生活は辛いこともありましたが、この研究科で学んだからこそ地元の美術館で働くことができ、現在の仕事にもつながっています。この先どうしようかと迷っている人に伝えられるのは、とにかく一歩踏み出してみようということです。大丈夫、自分の行動次第で道は切り拓けます。

2年間 一つのテーマに向き合うこと

2019年卒
平 希井 さん
（たいら けい）

1994年生まれ。2017年北九州市立大学法学部政策科学科卒業。大学時代、NPO法人循環生活研究所でインターンとしてLocal Food Cycling事業の立ち上げに関わる。2019年3月博士課程前期課程修了。2019年4月より一般財団法人日本民間公益活動連携機構で勤務。

私は、家庭から出る生ごみや、地域の有機資源を堆肥化し、食卓に再び戻す循環生活を広める母と祖母の背中を見て育ちました。コンポストの良さを実感する一方で、都会に暮らす人々は、コンポストに対してハードルを感じている人が少なくないということも感じていました。そんなとき、アメリカニューヨーク市でNYC Compost Projectという活動に出会いました。そこでは、たくさんのニューヨーカーが楽しく、オシャレに生ごみの資源循環に参加していたのです。帰国後、日本でこれまで培ってきた20年の堆肥づくりのノウハウと楽しい循環生活をコンセプトに、地域の中で住民参加型のコンポストの仕組み（コミュニティコンポスト）、Local Food Cycling事業を立ち上げました。

事業が始まり、1年後、コミュニティコンポストの継続率は、96%。2割以下の既存のコンポストと比較しても驚くべき継続率でした。「この現象にはどのような要因が関係しているのだろうか…」これが私の最初の問いでした。これまでの経験やLFCの現場で起こっていることを言語化したいと、福岡から21世紀社会デザイン研究科に飛び込みました。大学院では、「生ごみの地域内資源循環におけるコミュニティコンポストの可能性」というテーマで研究を進めました。

21世紀社会デザイン研究科の先生方は、多様で個性的です。なので、社会デザイン学、哲学、政策、物語法など様々な視点から自分の研究テーマを考えることができます。実際に、この研究科で学ぶことによって自分自身の視野も広がりました。中村先生の「特殊の中の普遍性」という言葉は入学当初から論文を書き終わるときまで常に私の中にあった言葉です。ある意味特殊ともいえるコンポストのある生活から普遍的なものを見出そうと、大学院で一つのテーマに2年間じっくり向き合い続けました。大学院での経験とその成果、そして素敵な先生方と仲間ができたことは、私の大切な財産です。今後は、現場と研究を行き来しながら活動を続けていきたいと思います。

久保 英也 特任教授
（くぼ ひでや）

神戸大学経済学部卒、博士（商学）。日本生命保険相互会社入社後、企画部、財務企画部、ニッセイ基礎研究所チーフエコノミストなどを歴任し、生命保険会社のALMや資産運用戦略を確立した。その後、教育、研究分野に転身し、神戸大学経営学部准教授を経て、滋賀大学大学院経済学研究科教授。滋賀大学ではリスク研究センター長、学長補佐を勤め、中国、韓国、ベトナムとの共同リスク研究事業を推進した。2015年には第7回世界水フォーラム（於:韓国デグ市）のコアセッションを運営し、環境リスクファイナンスの重要性を世界に提唱した。滋賀大学学長賞受賞（2回）、簡保財団優秀論文賞受賞、日本リスク研究学会会長、社会保険労務士。

自然環境リスクとリスクを外部に移転するリスクファイナンスを中心に、幅広いリスク分野に対応します。授業科目は、「環境リスクファイナンス」、「リスク移転と保険」、「ライフサイクルリスク」、「リスク学と企業の危機管理」となります。

研究の社会実装

30年の実務経験と12年の研究生活を通じて、研究者の役割は、理論を社会実装することであると考え、その手段として、産、官、学、地域とのネットワークづくりや海外の大学と国際共同研究を進めてきました。当研究科で皆さんが社会デザインを企図することは企業においてプロジェクトを推進することと基本的には同じことです。①理論の力を借りながら現在の課題について徹底した現状分析を行い、②その対応策を立案し、それらを③プレゼンテーションを通じ、プロジェクトを内外の人に認知させるという一連の行動です。これを記録したものが修士論文と考えればよいと思います。当然、論文としての作法もありますが、本質は①～③であり、これを繰り返すことで論文の切れ味が研ぎ澄まされていきます。

社会デザインに必須のリスクの考え方

世の中のほとんどすべての事象は何らかのトレードオフの関係を内包しており、とりわけ社会デザインにおいては色濃いと考えた方がよいでしょう。ある時は、公平性において、ある時はプロジェクトの予算・財政において、ある時は倫理や正義においてトレードオフが顕在化します。すべての人が100％満足することや予算が無限に使える状況は存在しないので、何を選択し、優先順位をどうするかという課題に直面します。

その時の一つの尺度が「リスク」であり、極論すれば、リスク1単位あたりの利益（メリット）が最大である案を選択するということが考えられます。当然、これを最終判断基準とする必要は必ずしもありませんが、重要な1基準であることは論を待ちません。この考え方を持ち合わせていない社会デザインは100％社会実装ができないということになります。確率的に物事を考えるリスクについて、皆さんと一緒に考えていきましょう。

中森 弘樹 助教
（なかもり ひろき）

立教大学21世紀社会デザイン研究科助教。京都大学総合人間学部卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科単位取得退学。博士（人間・環境学）。日本学術振興会特別研究員（PD）、京都大学非常勤講師等を経て、現職。NPO法人日本行方不明者捜索・地域安全支援協会理事。専門は社会病理／社会問題論。単著に『失踪の社会学―親密性と責任をめぐる試論』（慶應義塾大学出版会。日本社会学会第17回奨励賞［著書の部］および日本社会病理学会学術奨励賞［出版奨励賞］受賞）。

2019年度より、21世紀社会デザイン研究科に助教として勤務することになりました。「論文作成法」と「社会調査法」という、研究の方法論の講義を中心に、「親密性と現代社会」「社会問題の分析理論」といった専門的な科目、ゼミなども担当しています。

私自身は、主に社会学の立場から、親密性に関わる社会問題を研究しています。しばしば驚かれるのですが、人が家族や集団から消えてしまうこと、すなわち「失踪」が主な研究のテーマです。具体的には、失踪者の家族にインタビューをしたり、失踪にまつわるマスメディアの言説の変遷を分析したり、失踪者本人のライフストーリーを聞いたり……といった調査をしてきました。

常識を根本から問うこと

それにしても、失踪を研究していることが、なぜ驚きの対象になるのでしょうか。その理由は、失踪研究の困難さもさることながら、やはり失踪という現象それ自体の意外性に拠る部分が大きいように思われます。一般的に人と人との繋がりが希求される現代社会において、あえてその繋がりを断ち切ってしまうという行いは、かなりアブノーマルに見えるのでしょう。

ですが、失踪の言説の歴史を見てゆくと、今から40年ほど前の時代は、失踪は少なくとも現在ほど「珍しい」現象ではなかったことが分かります。もしかしたら、家族など親密な相手と繋がりを保つこと、連絡を取り合うことを当然だと感じる私たちの常識は、それほど絶対的なものではないのかもしれません。

社会問題から社会デザインへ

おそらく、このような気付きが得られるのは、失踪にかぎったことではなく、他の多くの社会問題の研究（あるいは社会学の研究全般）でも同様です。社会問題を研究するうえで、自身が当たり前だと思っていた価値観を相対化することは、その問題を解消する方策を考えるのと同じぐらい、重要な営みなのです。

この価値の相対化が、既存の社会とは異なる社会を創造する、社会デザインにおいても不可欠な過程であることは、言うまでもないでしょう。この研究科では、社会学的な思考を通して、みなさんが未来の社会を柔軟にデザインするお手伝いができれば幸いです。

2019年2月19日（火）開催

国際シンポジウム「キラーロボットのない世界に向けて」

会場 立教大学 池袋キャンパス8号館1階 8101教室
主催 立教大学 21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所
共催 特定非営利活動法人 難民を助ける会、キラーロボット反対キャンペーン

2019年2月19日、本研究科では認定NPO法人難民を助ける会（AAR Japan）、国際NGOキラーロボット反対キャンペーンとの共催でシンポジウムを開催した。

シンポジウムでは、中満泉・国連軍縮担当事務次長・上級代表のビデオメッセージに続き、ロボット兵器規制国際委員会（ICRAC）のピーター・アサロ博士とローラ・ノラン氏が報告、自律型致死兵器システム（キラーロボット）の国際的な規制の必要性に関し、国際人道法や倫理的課題などについて活発な議論が展開された。（長有紀枝）

2019年3月2日（土）開催（2部制）

たまひよカレッジin立教大学 2019年春講座

会場 立教大学 池袋キャンパス14号館
主催 立教大学 21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所
共催 株式会社ベネッセコーポレーション

育休復帰予定のご家族、子育て中の方向けに「たまひよカレッジ in 立教大学 2019年春講座」を開催。当日は約400名のママ・パパ・赤ちゃんにご参加いただきました。

午前は目白大学安齋徹教授を講師に招きワークを交えた育休復帰準備講座、午後は人気絵本作家サトシン氏を講師として招き立教大学萩原なつ子教授、大熊玄准教授とともに子どもの自己肯定感を考える子育て講座を行いました。午前午後ともに90％近い満足度となり、受講者に高い評価をいただきました。（萩原なつ子）

2019年3月9日（土）開催

「国際女性デー2019」記念イベント

会場 立教大学 池袋キャンパス 14号館
主催 立教大学 21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所
共催 ケア・インターナショナルジャパン、ジェンダーフォーラム

2019年3月9日、ケア・インターナショナルジャパンとの共催で、「国際女性デー2019」記念イベントを開催。全国から87名が参加しました。第1部では、ミス・ワールド2017日本代表の山下晴加さんをゲストに迎え、「だれもが自分らしく輝ける世界へ」をテーマにトークセッションを実施。第2部では、巨大な「人間すごろく」の上で、自身がコマとなって進みながら、クイズや水運び体験などを通じて途上国に暮らす女の子の1日が体験できるイベントを楽しみました。詳細はhttp://www.careintjp.org/news/a/IWD2019_report.html（萩原なつ子）

2019年3月24日（日）開催

暮らす人々が育ててきたまちだから、ポートランドは住みやすい

会場 立教大学 池袋キャンパス11号館3階 A304教室
主催 立教大学 21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所
講師 西芝 雅美（ポートランド州立大学行政学部長）／亀井 善太郎（21世紀社会デザイン研究科特任教授）

3月24日、ポートランド州立大学行政学部長の西芝雅美先生をお招きし、全米一住みやすいまちと呼ばれるポートランドのまちづくりを担う「ひと」をテーマに公開講演会を開催しました。

教室の定員150名を上回る多数の参加者と共に、住みやすいまち、ポートランドを現代の社会デザインの一例として採り上げ、まちづくりとその担い手について、共に考えました。

ポートランドでは、そこに暮らす一人一人が意志決定や具体的な行動に参加し、まちを育ててきました。だから、その結果として、住みやすくなったということ。そして、それでも、課題は次々にまた顕れてきて、それもまた、みんなが参加する次のまちづくりにつながっていき、それがずっと続いていくということ。そうした、あたりまえのようで、忘れてしまいがちな大切なことを、あらためて考える貴重な機会となりました。（亀井善太郎）

2019年3月23日(土)開催

社会や政治への「参加のバリエーション」を増やす

会場 立教大学 池袋キャンパス 本館2階 1202教室
主催 21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所
共催 日本シティズンシップ教育フォーラム

21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所と日本シティズンシップ教育フォーラム共催で、3月23日(土)13:00～18:00、標記講演会が開催された。

キーノートスピーカーに水山光春氏(青山学院大学教育人間科学部特任教授)、有賀久雄氏(松本工業高校教諭)、岩本真美氏(NPO法人ヒューマンフェローシップ代表理事)、コメンテーターに稲葉剛氏(21世紀社会デザイン研究科特任准教授)、コーディネーターに土肥潤也氏(NPO法人わかもののまち代表理事)を迎え、模擬投票や模擬請願、ボランティア活動、若者議会など、市民参加の学習／実践の方法が増えつつある一方で、これらの傾向から一定のパターン化もいわれるなか、日本での実践や海外の事例を踏まえ、これからの参加のバリエーションと実践していくための方法が参加者と一緒に模索された。 (中村陽一)

2019年7月13日(土)開催

2019年度 春季人権週間プログラム「ここからセクハラ!—アウトがわからない男、もう我慢しない女」

会場 立教大学 池袋キャンパス 14号館2階 D201教室
主催 人権・ハラスメント対策センター
共催 21世紀社会デザイン研究科・ジェンダーフォーラム

2017年アメリカから始まったセクハラ被害を告発する運動#Me Tooが国内でも活発になり、人権問題としてのセクハラが社会的課題として再び注目されている。そこで、セクシャル・ハラスメント研究の第一人者である、大阪大学人間科学研究科教授の牟田和恵先生をお招きし、セクハラに対する正しい理解啓発を目的に公開講座「ここからセクハラ!—アウトがわからない男、もう我慢しない女」を開催した。この問題への関心の高さを示すように、多くの参加者を得た。 (萩原なつ子)

2019年7月14日(日)開催

ともに自分らしく生きられる社会をめざして ～地域コミュニティ再生の条件とは何か～

会場 立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 カンファレンス・ルーム
主催 21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所
共催 社会デザイン学会

21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所と社会デザイン学会の共催で、7月14日(日)14:00～17:30　太刀川記念館3階カンファレンス・ルームにて標記講演会が開催された。

まず、本田徹氏(福島県広野町高野病院医師、SHARE＝国際保健協力市民の会理事長)による基調講演では、全国的に広がる高齢化の現象が、貧困のレベルを増大させ、医療や福祉の劣化を招き、それがまた貧困と健康被害の状況を深刻化させ、日本全体でコミュニティの存立基盤を根底から崩壊させつつある状況について話がなされた。

続くパネル討論では、石坂わたる氏(中野区議会議員)、子籠敏人氏(あきる野市議会議長[講演会時])、加藤木桜子氏(練馬区議会議員)、井上温子氏(板橋区議会議員)という研究科の卒業生でもある議員の皆さんが亀井善太郎教授のコーディネートのもと、地域コミュニティの現状と課題をめぐり意見交換を行った。

(中村陽一)

2019年7月24日～9月14日(水・木・土)開催

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科×日経 Biz アカデミーPresents「ソーシャルデザイン集中講座2019」

会場 立教大学　池袋キャンパス
主催 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科・日経ビジネススクール

今年で7年目を迎える毎夏恒例の標記講座が、7月24日～9月14日(お盆の時期を除く)の毎週水・木・土の3クラス構成で行われた。全7回の講座受講により、社会デザインの基礎が一挙に学べ、最新事例を通じての解説に加え、理論と実践に優れた講師陣が毎回、講師とコーディネーターによる演習形式の授業を展開した。各回講師とテーマは以下の通り。

1)社会デザインへの招待—ソーシャル・イノベーションへ向けて(中村陽一教授)、2)超高齢社会から紐解く、消費社会の変容(高宮知数講師)、3)サステナビリティ・ビジネスが促す社会変革(広石拓司講師)、4)危機管理からみたソーシャルデザイン(指田朝久客員教授)、5)発達し続けるための哲学—アイデンティティと内発性(大熊玄准教授)、6)経営組織戦略とソーシャルデザインーリーダーとフォロワーの物語(梅本龍夫教授)、7)ソーシャル・イノベーション実践論2019(石川治江特任研究員)。企業人をはじめとする応募受講生約150名と講師陣との交流会も行われ、議論と親睦の熱い夏が展開された。 (中村陽一)

2019年度全学共通科目「コラボレーション科目」開催決定

立教大学社会デザイン研究所・大和ハウス工業株式会社寄付講座
文化の居場所を考える
—21世紀の文化の容れ物 変容するビルディングタイプ

主催 社会デザイン研究所　共催 立教大学21世紀社会デザイン研究科　協賛 大和ハウス工業株式会社

昨年度に引き続き、各々の伝統的ビルディングタイプが担っていた文化的背景とそれとは異なる空間デザインが登場した社会的変化、今後についてビルディングタイプごとに見ていくとともに、タクティカルアーバニズムのような、新しいデザインと使われ方を生み出す方法論についても紹介していく、ユニークかつ文理融合学際型テーマの講座を開講しています。8月6日～8日には、横浜市にある若葉町ウォーフで、2泊3日の学生ワークショップと研究会を実施致しました。研究会・講座のアウトプット、企業と学生の新しい交流の場となり、立教大学学生のみならず一般の方、他大学の学生が集まり濃厚な3日間となりました。

秋学期は、金曜4時限(15:20～17:00)にて全学カリキュラム、コラボレーション科目として『ビルディングタイプ』『リノベーション』『学校・幼稚園』『オフィス』『スタジアム・オリンピック』『住宅』『緑・自然』『広場』『ホール・劇場』『デザインとICT』『タクティカル・アプローチ』といった11テーマを扱います。その他、一般の方にもご参加頂ける講演会・研究会を開催予定です。身近な話から専門性の高い内容まで、幅広い内容を企画しています。社会人や他大学の学生の方も、是非ご参加下さい。

Design Summer Camp 2019 学生ワークショップ

問合せ先
寄付講座・文化の居場所事務局(月、水～金 11:00～18:00)
TEL/FAX:03-3985-4725
MAIL:ibasyo-kouza@rikkyo.ac.jp

2019年度 進学相談会

2019年 第3回 9月21日(土) 第4回 11月9日(土) 13:30～16:30	**◆2019年度　進学相談会** 会場／立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館3階　カンファレンスルーム 対象／21世紀社会デザイン研究科に興味をお持ちの方 内容／修了生によるプレゼンテーション、個別相談ほか 参加費／無料　申し込み／不要 主催／21世紀社会デザイン研究科 問合せ先／立教大学独立研究科事務室 TEL.03-3985-3321　10:30～18:30(月～金) 10:00～13:30(土)

公開講演会

2019年 10月19日(土) 13:30～17:00	**◆「女性解放をめざした先輩たちと出会う」—フェミニズムを引き継ぐために—** 会場／立教大学池袋キャンパス 7号館　7102教室 主催／21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所 共催／立教大学ジェンダーフォーラム・認定NPO法人WAN(ウィメンズ・アクション・ネットワーク) 資料代／500円　申し込み／要　https://wan.or.jp/article/show/8508 問合せ先／立教大学独立研究科事務室 TEL.03-3985-3321　10:30～18:30(月～金) 10:00～13:30(土)
2019年 10月27日(日) 13:30～16:30	**◆「人生会議」を社会デザインする～看取り・弔いの視点から「つながり」の現代的意義を考える** 会場／立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館3階　カンファレンスルーム 主催／21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所 共催／看取りと弔いの社会デザイン研究会 参加費／無料　申し込み／事前申込者優先 問合せ先／社会デザイン研究所 TEL.03-3985-4725　11:00～18:00(月・水・金開室)

発　行／
立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集長／萩原 なつ子
編集担当／
中森 弘樹・木戸 さやか
発行日／2019年9月12日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

21世紀社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報をホームページでお知らせしております。

21世紀社会デザイン研究科ホームページ
https://sds.rikkyo.ac.jp/

21世紀社会デザイン研究科 Facebook
https://www.facebook.com/21csd/

デザイン:(株)ペンシルロケット